

＜書 評＞

Geraldine K. Carini
Jacqueline Joseph Birmingham (共著)
大井淑雄 (自治医大) 監修

ベッドサイドの牽引療法

浅山 滉 (産業医大リハ医学)

このたび国立療養所東京病院のリハビリテーション学院、伊藤直榮、島田孝の両氏の努力下、Traction Made Manageable (自己学習方式によるベッドサイドの牽引療法)の訳本が、協同医書出版社から発行された。自治医大の大井淑雄氏が監修しておられる。著者は米国 Connecticut 州の Hartford 病院の整形外科病棟で牽引療法の Nursing Care に多年の経験を有していると思われる G.K. Carini と J.J. Birmingham の共著である。普通の整形外科病棟で行われている代表的な10数項目の牽引方法を取りあげ、その各々の解説とまとめの試験問題や解答がのっていて、わずか130頁のハンディな

書物であり、大きな図と活字、広いスペースのために読んでみたくなる。実際の病棟でもこれだけを知っておれば殆んど間に合ってしまう。

牽引療法は整形外科の治療の基本をなすものであり、急性期の緊急的処置から、慢性症の骨盤牽引まで幅広い治療手段を有し、それだけに、牽引療法中のケアは解剖生理学的基礎と、牽引の力学的知識が必要となる。この書は、これらの知識を前提として記されているが、第一章から、牽引の一般的管理上の注意が一応書かれている。

もとより牽引自体は医師の責任でなされるものであるので、一度適応された牽引療法を継続する途中にお

けるリスクのチェック項目やスキンケアなどの看護上の具体的手段が項目ごとに繰り返し述べられている。そして安静臥床中に生じる廃用症候群の予防にベッドサイドのリハビリ的配慮が、具体的に附記されている。敢えて2、3の私見を述べるなら、図にはひとこと簡単な説明がほしい。牽引用具の説明が不足している。小さい略図を挿入すればもっと判り良い所が多々感じられる。著者が臨床医でないためのもどかしさが感じられる点がある。訳文は直訳すぎるきらいがある。また、この種の訳本でいつも問題となるが、訳者が日本語的医学用語を用いて、初めから意識することが、読者へのサービスだと思う。この書物は解剖生理学上の理由づけに乏しい点、もの足りぬ面もあるが、看護学科やリハビリ学院の学生と病棟のスタッフにすすめられる本である。

(B5, 頁130, 1982, ¥2,800, 協同医書出版社 刊)